

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「沖縄は物価が安いから生活費もかからないんでしよう」  
県外の人と話していると、ときどきそんなふうに言われて、うーん、と口ごもつてしまいます。

A、市場のお惣菜屋さんがつくるお弁当や、県内でとれたオクラやゴーヤーなど、「(I)」のものは安い。でも、県外から来るリンゴやミカンをはじめとして、食品はだいたい東京のスーパーより高いです。特に離島の売店に行くと、お菓子や調味料に目を疑うような値段がついています。輸送費がかかるためです。

通販で何か買おうとするたびに、「送料無料 ただし、沖縄・離島を除く」というフレーズに泣かされます。「一律千円」などと書かれると、工夫すれば安く送れる方法もあるのになあ、と悲しくなります。

B、書店に並ぶ本は送料が上乗せされることもなく、同じ値段です。店にない本を出版社から取り寄せてもらっても、手数料はかかりません。

東京から沖縄まで船で運ぶので、新刊は発売日より四日遅れて入荷します。飛行機なら二日で済むのにと不満を感じながらも、とにかく定価だけは守ってくれている書籍の流通のしくみを、ありがたいと思いました。

再販制、という言葉をご存じでしょうか。正確には「再販売価格維持制度」。ふつう、商品の値段は(II)が自由に決められます。独占禁止法は価格の拘束を禁止していますが、書籍・雑誌・新聞・音楽ソフトなど、特定の品目は例外となっています。個々の本の価格を決めるのは(III)なのです。

再販制があるから、本はいつでも買っても同じ値段です。都心の大型書店でも地方の小さな書店でも変わらないので、お

客さんは安心して本を買うことができます。

東京の新刊書店で働いているときはあたりまえだと思っていた制度も、沖縄で古本屋を始めると、<sup>①</sup>また違って見えてきました。日本の出版のありかたを決めてきた再販制について、あらためて考えてみました。

C、どうして本は独占禁止法の対象から外されているのでしょうか。「本は文化なので価格競争はそぐわない」というのが理由のようです。わかるような、わからないような。本や新聞や音楽だけでなく、洋服も家具も食べ物もみんな「文化」だと思うのですが。ただ、本は「とりかえがきかない」という点で、もしかしたら特別なのもかもしれません。

白いシャツも、黒いテールも、いろいろなメーカーがつくっています。欲しい器が高くて買えなければ、似たようなデザインの良い器で我慢するしかありません。ほうれん草が売り切れていたなら、小松菜を買ってもいいでしょう。

でも、プラトンを読む宿題が出たのに、ソクラテスで代わりにするわけにはいきません。推理小説の上巻が見つからないとき、下巻から読むわけにもいきません。みんな同じように見えてもとりかえがきかないのが、本なのです(実際には実用書や参考書など、ある程度はほかの本で代用できるものもあります。また、本当にすべての本が<sup>②</sup>唯一無二で存在を守るべきかどうかのならば、本を絶版にしてはいけないと思うのですが、どうでしょう)。

日本のどこでも、同じ本が同じ値段で買える。これはすごいしくみなのだ、と、沖縄に来てあらためて思い知りました。ただ、<sup>③</sup>それがなによりも大事なことなのかと考えると、よくわからなくなります。

店が商品の価格を自由に決められないため、書店の商売のしかたはかなり制限されています。セールをして人を呼びこむこ

ともできませんし、なんらかの理由で返品できなくなった本を安くして処分することもできません。また、一冊仕入れても百冊仕入れても※卸値は同じです。価格で競えない以上、立地や店の広さ、棚づくりや品揃え、接客などで勝負するしかありません。

再販制をなくしたらどうか、という声は以前から業界の内外であがっています。古いルールに縛られているせいで出版業界はだめになったと言われることもあります。再販制は、※取次を通した委託販売制（書店が本を返品できる制度）とも強く結びついていきます。このふたつの制度をなくすと、本の流通は今とはまったく違ったものになるでしょう。

注文した本はすべて買切りで、出版社から書店に卸す※掛率は今より低く、書店が値下げして売るのも自由。④取次を通さず、出版社と書店が直接取引することもできる。そうなったら、書店の棚はどんなふうに変わるでしょうか。それにつれて、出版社の出す本も変わっていくのでしょうか。

日本の出版流通は、雑誌をベースにして発達したそうです。雑誌を運ぶ便に書籍も載せることで、全国への流通網ができていきました。

小さな書店ほど、店の売上に占める雑誌の割合が大きいそうです。しかし、雑誌の売上はこの二十年でほとんど半減しています。また、コンビニでも雑誌が買えるようになったこともあり、書店に足を運ぶ人は減りました。このため、小さな書店は経営が立ちゆかなくなり、次々に店を閉めていきます。⑤雑誌を主体とした書店が成り立たなくなっているのなら、雑誌と共に発展した流通のしくみも、もしかしたら変えるときが来ているのかもしれない。

再販制がなくなると、特に売れ筋の本は値下げ競争が激しくなり、力の強い大型書店が独占的に売るようになっていくでし

よう。小さな店はその店独自の売れ筋をつくり、地道に売っていくしかありません。

今すでに、ベストセラーは大型書店やネット書店に奪われ、小さな書店には回ってこない状況になっています。雑誌やベストセラーを売るだけではない書店のスタイルを、書店で働く人たちは模索しています。

買切りでも今より卸値が低くなれば、利益を上げられる可能性が出てくるかもしれません。取次を通さず直接送ってもらえれば、入荷も早くなります。

実は、すでにあちこちで、これまでとは違う流通の方法が試されています。取次を通さず書店と直接取引をしている出版社もありますし、一部の本を買切りにして、かわりに卸値を下げる出版社も出てきました。業界全体から見ればまだまだ小さな動きですが、少しずつ新しい流れが始まっているのです。

私は古本屋なので、新刊は出版社との直接取引で仕入れています。一社ずつ本の掛率や送料の負担、精算のタイミングについて相談し、定期的に連絡をとりあっています。個別に交渉する手間はあっても、お互いにとってよい方法を本屋と出版社が一緒に考えるのは、決して無駄な作業ではありません。もちろん、何百何千という出版社を相手にするとなったら、やはり限界があるのですが。

再販制が一九五三年に制定されてから、もう六十年以上たちます。それによって⑥守られてきたものも縛られてきたものも、はかり知れませんが。廃止すべきだとは言えませんが、ずっとこのままでいられるとも思えません。

これからも、私は小さな古本屋としていろいろなやりかたを想像し、出版社のみなさんと試して行きたいです。

（宇田智子 『本屋になりたい』）

※(文中のことばの意味)

卸値 … 卸売業者が小売業者に商品を売り渡す時の値段。

取次 … 商品の売買を仲立ちする人。

掛率 … 販売価格に対する仕入れ価格の割合。

問 1

しいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

A

… ア それでも  
ウ もしくは  
エ だから

イ 確かに

B

… ア でも  
ウ だから  
エ また

イ そして

C

… ア しかし  
ウ そもそも  
エ 例え

イ つまり

問 2

(I) にあてはまる四字熟語として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 地産地消  
ウ 三位一体

イ 以心伝心  
エ 我田引水

問 3

(II)・(III) にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 作者  
イ 読者  
ウ 小売店  
エ 出版社

問 4

線①「また違<sup>ちが</sup>って見えてきました」とありますが、なぜですか。その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 食品などに別に送料がかかってくる沖縄に住んでいると、本が定価で買えることを新鮮に感じるから。

イ 東京と比べて発売が遅れる沖縄に住んでいると、本が発売日に買えることに違和感があるから。

ウ 雑誌や新聞などでも値段が上がる沖縄に住んでいると、本に送料がかからないことにありがたさを感じるから。

エ 大型書店が全くない沖縄に住んでいると、古本屋の競合相手がいないことに安心できるから。

問 5

線②「唯一無二<sup>ひついつに</sup>」とありますが、これを言いかえた部分を文中から十字以内でぬき出しなさい。

問 6

線③「それ」とは何を指しますか。「〜こと」につながるように、文中から二十字以内でぬき出しなさい。句読点なども字数に数えます。

問7 ———線④「取次を通さず、出版社と書店が直接取引することもできる」とありますが、同じたとえとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア デザイナーがオリジナルのブランドを作成する。
- イ 農家が農作物をスーパーの直売コーナーに出荷する。
- ウ 塾講師が生徒に対してテスト直前の対策講座を行う。
- エ タクシードライバーが目的地が同じ客を複数同時に運ぶ。

問8 ———線⑤「雑誌を主体とした書店が成り立たなくなっている」とありますが、なぜですか。文中のことばを使って、三十字以内で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問9 ———線⑥「守られてきたものも縛られてきたもの」とありますが、その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 価格を固定することで客が安心して本を買える一方で、各書店の商売方法を制限している。
- イ 本を「文化」と定めて絶版を防いできた一方で、古本屋の需要が減っている。
- ウ 多様な交通手段を使って本を全国へ運べるようになった一方で、書店の数が減少している。
- エ 書店が出版社に直接連絡して価格を決定できる一方で、本の定価そのものが上昇している。

問10 本文の内容にあうものを次の中から二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 書店に並ぶ本が全国各地で同じ値段で買えるのは、本が「文化」として認められているからである。
- イ 再販制をなくすべきだという意見は以前からあるが、国が拒否している。
- ウ 日本全国の流通網が発展したのは、雑誌や書籍のおかげである。
- エ 雑誌の売上が減少してきている今、新しい流通方法を考えるべきである。
- オ 再販制をなくすことで、大型書店よりも小さな書店が生き残りやすくなる。
- カ 古本屋は各出版社と直接連絡を取って価格を決定するので、新刊書店よりも生き残りやすい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

父の突然の思いつきで、福岡市内の団地から小さな村に引っ越すことになった「私」（加奈子）。「私」たち一家は家が建つ様子を見るために、何度かその場所を訪れていました。本文は、その時のことを「私」自身が回想する場面です。

※ 咲子ちゃんの家の前に延びている道は、山の森へ続いていった。森に続く道の途中に、私が住むことになった家への道が枝のようになり延びている。道に立って山の方を眺めると、うっそうとした緑が奥に見えた。ゆるやかな上り坂の道は、奥へ行くほど細くなり、風に揺れる深い緑の森へしずかにのみこまれていくようだった。道の奥は、樹々の葉が作る影に閉じこめられて、暗い穴のような闇が見えるばかりだった。

家を建てている間、何度もその道を眺めた。母は私たち姉妹に、あまり遠くへ行ったらいかんよ、とやわらかく制止していた。両親は、私たち子どもを道の先に連れていってくれることはしなかった。私たちも、知らない村の知らない森は、とてもこわくて遠い存在だった。

あの奥の道まで行つてみようと、最初に言ったのは私だった。なんども訪ねるうちに、この場所に対する緊張感がほどけてきたせいだろう。私にそう声をかけられた姉は、え、とひとこと小さく言つて、目を少し見開いた。夏の強烈な暑さが去り、涼しい風が吹きはじめていたころだった。もう蝉は鳴いていない。心なしか森を覆っている樹々もひところの命の勢いをひそめ、おだやかにうたたねをしながらそよいでいるようだった。

「あの、奥へ？」

① 姉は、眉間にかすかにしわをよせて、まぶしそうに顔を上げ、森を見つめた。

「ちよつとだけ。ね。 ※ とつこちゃん、ねとるし」

母の弁当の昼食を済ませたあとで、妹は、母と一緒に車にもどつて昼寝をしていた。父は現場の人との打ち合わせで忙しく、私たちが何をしているかは ① 眼中になかった。私と姉は、時間をもてあましていたのだ。

「ちよつとだけ、ねえ」

そう口にする、 ② 姉の眉間のしわはさつと解かれ、愉快そうに口の端が上がった。「ちよつとだけよ」は、当時テレビで流行っていたギャグのセリフでもあった。

「ちよつとだけよう」

私はふざけてその口調を真似て言った。

「ちよつとだけよう」

姉も一緒に真似をして、くすくす笑った。ちよつとだけよう、ちよつとだけよう、と笑いながら、姉と私は、森の奥へ奥へとかけだしていった。

遠くからは闇に見えた森の奥は、左右の木に空を覆われているとはいえず、思っていたよりも明るく、道の草も伸びすぎないように手入れがされているらしく、おだやかな雰囲気だった。

ふいに、明るい光が降ってきた。道を覆っていた木がとたえ、カラフルな色が目にとびこんできた。森の中に一軒の家があり、家の前の庭に黄色や白やピンクの花々が植えられていたのだ。家の壁は真っ白で、オンシジ色の三角の瓦屋根には、煙突が突き出ていた。

「わあ、かわいい家！」

思わず姉と一緒に叫んだ。花壇のある開放的な庭の真ん中には大きな木がよつきりと生えていた。庭の中に赤いバケツと深い緑色のジョウロがおかれているのも見えた。 ③ むそうさに

放置されていたようだったが、白い壁とオレンジ色の屋根の家との取り合わせが、とてもおしゃれだと思った。奥の方の壁には、緑の蔦が伸びていた。

「日本の家やないみたい。前に読んだ、童話に出てくる魔女の家みたい」

姉がまばたきをしながら言う言葉に、うん、うん、と何度もうなずいた。

「すごいねえ。こんなところに。どんな人が住んどんんやろう」  
おもわず引き込まれるように庭に足を踏み入れようとする私の腕を、姉がつかんだ。

「かなちゃん、ダメ。よそのお家に勝手に入ったら」  
もちろんそんなことは私も頭ではわかっていたが、<sup>③</sup>好奇心が理性をおしのけて支配していたため、腕をつかまれたまま、でもう、と言つて首をそつちの方にのぼしていた。

と、どなたあ？ という高い声が奥から聞こえて、私たちは思わず、きやっと声を上げて逃げるように、道の奥へと走り出した。

走りながら少し冷静になった私は、べつに逃げることもなかったんじゃない、と姉に問いかけたが、姉は真剣な横顔をくずさなかった。

そのまま無言で走り続ける姉に私がついていく形で、どんどん森の奥へと、私たちは入っていったのだった。

姉が突然、はっとした様子で立ち止まった。

「かなちゃん、鳥居がある」  
姉の目線の先の、うす暗い道の向こうに細い石の鳥居がたしかに見えた。

「ほんとや」

「神社があるんやね」

「行く？」

「え……うん……」

「神社って、神様がおるところよね」

以前、信心深い祖母から教えてもらったことだった。

「ちゃんと丁寧に挨拶した方がいいよね」

姉はうなずきながら、<sup>④</sup>目が少し泳いでいた。

「行ってみようよ」

私は、姉の手をつかんだ。姉は反射的に身体をかたくして、足元を見た。

「苔だらけ……」

言われて足元を見ると、神社とこちら側の世界を隔てるように小さな川が流れていて、かすかに湾曲した石の橋がかかっていた。その石の橋が、びっしりと苔むしていたのである。姉が私の手を握り返してきた。

「ゆっくり、行くとよ」

私たちは少し腰を落とし、ゆっくりと慎重に、深緑色の苔を踏みながらその橋を渡った。

橋は鳥居を抜ける参道に直接続いていて、その道もびっしりと苔で覆われていた。あまり人が入らないところなのかな、と思いつつながら鳥居をくぐり、<sup>A</sup>奥へと進んでいった。姉とはずつと手をつないだままだった。

行き止まりに小さな社があり、その前に小さなさい銭箱があった。こういうのって、ちゃんとおさい銭、あげた方がいいよね、と姉を頼るようにその目を見たが、もってなかよ、お金なんて、と姉は視線をはずして目を伏せた。えー、と残念がる私に、姉は<sup>B</sup>向き直り、じゃあ、かなちゃんはどうかんとつめよられてしまった。

「ない……」

私は姉に向けて両方の手のひらを広げてみせた。姉は、ふうと息を吐いて、<sup>\*</sup>、と言った。

「え、お祈りは？」

「だって、おさい銭箱があるってことは、タダでお祈りしちゃいかん、てことなんやけん」

そうなのか、と思いつつ名残惜しい気持ちのままさって、社の中をのぞきこんだ。中には額縁に収められた写真がいくつも飾られていて、ふとその中の一人と目が合った。紋付きの羽織を着た※日本髪にほんがみの女性で、きらり、とその目が一瞬光った。思わずきゃつと声を上げてしまった。

「どうしたと？」

すでに社に背を向けていた姉が振り返った。私は腰が抜けたようになって、腰を低く落としたまま、**C**口を動かしながら、姉の方に近づいた。

「ひ、ひ、ひ、ひかった、ひかったと！ 目が、ひかったと！」

「なんいいようと」

「や、やしろの、中の、人の、目が……」

「ほんとに!? な、中に、人がおると!?」

「ちがうちがう。ほんとの人やなくて、しゃ、写真、なんやけど、その、写真の着物の女の人の目が、目が光ったと！」

姉にすがりつくように抱きついたが、ぼうぜんとして立ちつくす姉の顔は真つ青だった。

「来るな、いいようと」

「ん？」

⑤「うちら、まだよそもんやもん。まだ住んでないっちゃもん。

まだこんなところ来たらいかんかったんよ」

「ほんとに？」

「もどろ。今すぐ！」

姉は、言うなり⑥**踵を返して**かけだした。

「あ、待って」

あわてて姉のあとを私は追いかけた。鳥居をふたたびくぐり、

苔むした石の橋をわたろうとしたところで、つるり、と足の裏がすべった。川におっこちる、と目をつぶった瞬間に、手をぐつと引かれた。姉が手を取ってくれたのだ。しかし、勢いあまって道の方に二人して倒れこんでしまった。思い切り膝を打ち、肘を擦った。

転んだ瞬間は、わけがわからなかったが、緊張がぶつんと切れたとたん、じわじわと怖さと痛みにおそわれて、うわあつと声を上げて泣いてしまった。かなちゃん、こんなところで泣いたらいかん、と姉がなだめてくれる声は聞こえなかった、⑦**泣き**だした「泣き」は、自分でも止めることができなかった。

「だいじょうぶう〜」

姉とは違う、やわらかな声がかすかに聞こえた。誰の声だろうと、考えはじめると、胸を支配していた「泣き」反応が薄れていき、しゃっくりに変わっていった。

「あらあ、おじょうちゃんたち、だいじょうぶ？ 転んじやつたの？」

顔を上げて目を開くと、一人のおばあさんの顔が目前にあった。ふわふわの灰色の髪をしていて、淡い紅色の縁の眼鏡をかけ、白いシャツの上から青い細い線の入った※サロペットを着ていた。眼鏡の奥の瞳はうすい茶色で、透きとおっていた。

「おひぎ、怪我しちやっっているわねえ。お手当してあげますから、うちにいらつしやい。すぐそこのよ」

白い顔にたくさんしわを寄せて、おばあさんがにっこりと笑った。

いえ、そんな、だいじょうぶです、と遠慮する姉や私におかまいなしに、いいからいいから、子どもは遠慮なんてするものじゃないのよ、と言いながら私の手をやさしい力で引いていった。⑧**あたたくくて、とてもやわらかい手**だった。

「わたしの名前はね、ハルっていうのよ。みんなにおハルさん

って呼ばれてるの。ほら、あの家よ」

おハルさんの指の先に、さっきここへ来る途中で見かけた、白い壁にオレンジ色の屋根の、あのかわいい家があった。

( 東直子 『いと森の家』 )

※(文中のことばの意味)

咲子ちゃん : 「私」と一番家が近い友達。

とっこちゃん : 「私」の妹。

日本髪 : 日本に古くからある女性の髪形。かみがた

サロペット : 胸当てとつりひもがついたスカート。

問1

~~~~~線①②③のことばについて、文中における意味として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 眼中になかった

ア 無価値だった  
ウ 無意識だった  
イ 無関心だった  
エ 無個性だった

② むぞうさに

ア 丁寧  
ウ 簡単に  
イ 乱雑  
エ 順番に

③ 踵かかとを返して

ア ひきかえして  
ウ つまずいて  
イ くりかえして  
エ 手を引っ張って

問2

A C にあてはまる最もふさわしいことばを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア あわあわと  
イ ふっと  
ウ そろそろと  
エ きりりと  
オ さらっと

問3

線①「姉は、眉間にかすかにしわをよせて」・線②「姉の眉間のしわはさつと解かれ」とありますが、このときの「姉」の気持ちの変化はどのようなものですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 妹よりも森への恐怖心が強いため妹の提案をよく思っていないかったが、妹の冗談によって緊張がほぐれ、森への抵抗感が薄まっている。

イ まだ慣れない土地で妹と二人きりで行動することを迷っていたが、妹が必死に頼み込むのを見て、からかってやるうという気持ちになっっている。

ウ 何も考えずに好奇心だけで動こうとする妹に嫌悪感を抱いていたが、両親がかまってくれない悩みを解消するため、妹に従うつもりでいる。

エ 森への恐怖や母親の言いつけがあり森に入ることをためらっていたが、妹のおどけた態度の影響を受け、大丈夫だろうと思いい直している。

問4

線③「好奇心が理性をおしのけて支配していた」とありますが、どういうことですか。次の文のYにあてはまることばを、文中のことばを使って、指定された字数以内で答えなさい。

X(二十字)という気持ちよりも、Y(三十字)という気持ちの方が勝っていたということ。

問5

線④「目が少し泳いでいた」とありますが、このときの「姉」の気持ちとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 妹が確認してきた祖母の言葉が記憶になく焦っている。

イ 他人の家をのぞき込んだことをまだ気にしている。

ウ 迷子であることを妹に気取られないようごまかしている。

エ 森の奥に突然現れた神社の雰囲気気後れしている。

問6

次から選び、記号で答えなさい。

- ア ちよつと休憩しよう
- イ じゃあもう帰ろう
- ウ はやく神社の中を見よう
- エ 神様に挨拶だけしていこう

問7

——線⑤「うちら、まだよそもんやもん」とありますが、このときの「姉」の気持ちとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア まだその土地の生活や風習をよく知らない自分たちが、森の奥にある神聖な場所に侵入してしまつたと、森への恐怖が復活している。

イ 引越す先土地で起きた突然の怪奇現象に、ここに引越すことは間違いであつたと気づき、引越しの取りやめを親に説得しようと思つている。

ウ いつも親と一緒に自分たちが、初めて二人きりで行動したときに怪奇現象にみまわれてしまい、親の言いつけを聞いておけばよかったと後悔している。

エ 妹は土地になじみはじめているのに、自分はいつまでも森を怖がっていて、そのような自分に対して神様のぼちが当たつたと自分を責めている。

問9

——線⑦「あたたかくて、とてもやわらかい手」とありますが、ここで「おハルさん」はどのような存在として表現されていますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 神社で見た日本髪で和服の女性の写真に対して、灰色の髪で洋服を着ている生きた人間という対照的な存在。

イ 直前までつないでいた「姉」との手を離させることで、「私」が自立するきっかけを与える存在。

ウ 慣れない土地で予想外の出来事にみまわれ心身をすり減らしていた姉妹を受け入れ、安心感をもたらす存在。

エ 長い間両親にかまってもらえなかった姉妹が久しぶりにふれる、大人の優しさを代表する存在。

問8

——線⑥「吹きだした『泣き』」とありますが、この「泣き」に込められた気持ちとして**ふさわしくないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 混乱    イ 痛み    ウ 恐怖    エ くやしき

問10 「姉」と「私」の性格の違いを説明したものとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「姉」は注意深く、どのような行動に対しても慎重になりがちな一方で、「妹」は好奇心があり思いついたらすぐに行動に移す活発な性格。

イ 「姉」は恥ずかしがりやで、初対面の人間には人見知りをしてしがちな一方で、「妹」は誰とでもすぐに仲良くなることができる社交的な性格。

ウ 「姉」は決断することが苦手で、物事の決定を他人に任せがちな一方で、「妹」は誰にも相談せず勝手に動く自己中心的な性格。

エ 「姉」は頑固なところがあり、自分の言ったことを通そうとしがちな一方で、「妹」は人の言うことを聞いて動く素直な性格。

問題は次のページに続きます。

【三】 熟語にはそれぞれの漢字の持つ意味によって、漢字どうしの関係性が示されます。次の①～⑤の熟語の組み立て方としてふさわしいものをあとから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① 年長
- ② 土地
- ③ 不安
- ④ 読書
- ⑤ 公私

ア 似た意味どうしになっている。  
イ 反対の意味どうしになっている。  
ウ 主語と述語の関係になっている。  
エ 述語と目的語の関係になっている。  
オ 下の語を打ち消している。

【四】 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

- ① 地図のシユクシヤクがわからない。
- ② 犬は飼い主へのチュウセイ心こころが強い生き物だ。
- ③ トウロン会かいは来週開催かいされる。
- ④ コンナンなんな道みちを乗り越えてこそ人は成長する。
- ⑤ 久しぶりにコキョウきょうに帰ってきた。
- ⑥ そのイベントには延べ百人が動員された。
- ⑦ 従来じゆんらいの作戦でいくべきだと主張する。
- ⑧ 勇気を奮ふるって参加する。
- ⑨ 身体測定で胸囲むねどを測る。
- ⑩ 沿岸えんがん付近を散歩する。

これで問題は終わりです。